

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	崔 世卿
論文題目	西脇順三郎論－同時代の雑誌との関わりを中心に－
<p>審査要旨</p> <p>本論文は、詩人西脇順三郎の詩集『Ambarvalia』(1933)から『近代の寓話』(1953)にいたる作品を中心に、同時代の詩壇、およびその発表舞台としての雑誌との関わりに主眼をおいて新たな検討を試みたものである。論文の構成は、第一部『Ambarvalia』と同時代の雑誌、第二部『近代の寓話』と新出資料の二部からなる。第一部においては、従来、必ずしも明らかでなかった西脇の初期の匿名時代・詩的沈黙の時代の実態を明らかにし、同時代の詩壇との関わりが薄いと見られていたこの間の西脇が、さまざまな雑誌と関わりながら第一詩集『Ambarvalia』に収録される諸作品を執筆・構成していった経緯とその意義とを、綿密な調査によって裏付けている。また第二部においては、詩集『近代の寓話』を中心に、これまで初出未詳および全く知られていなかった作品を、同時代の雑誌を渉猟しつつ数多く発掘、戦後のラジオ詩との関わりや西脇の詩の聴覚性にも初めて光をあてている。その資料的価値も高く、西脇順三郎の作品史および研究史のみならず、昭和初期のモダニズム詩の研究にも新たな進展をもたらした意義が認められ、本論文は博士学位請求論文としてふさわしい達成を示していると評価できる。以下、本論文の構成に従って、その内容と特色、そして審査結果を報告したい。</p> <p>まず、序章において論者は、西脇の五十年に及ぶ長い詩人としての活動の足跡と研究史を確認しつつ、これまで個々の詩ないし詩集についてはさまざまな角度から分析・解釈がなされてきたものの、同時代の詩壇や雑誌媒体との関わりの中なかで、それらの詩や詩集の執筆から編纂にいたる成立過程については、十分に考察がなされてこなかった研究の現状を展望している。そして、本論文においては、詩集『Ambarvalia』から『近代の寓話』までの作品を中心に、同時代の詩壇との関わりに主眼をおいて検討を加えようと試みている。とくに論者が強調しているのは、第一に同時代の雑誌との関わりから詩集所収の作品について検討すること、第二に西脇の詩史の区分を再検討して作品の生成過程を考察すること、そして第三に新たな基礎資料を採求してより確かな作品の読みを試みることであって、個人的な営みとして捉えられやすい詩作の場を同時代の雑誌に求め、その雑多で多様な側面が西脇の詩の背後にあることを示唆した労作といつてよい。</p> <p>その上で、第一部『Ambarvalia』と同時代の雑誌では、西脇の詩的出発期から『Ambarvalia』成立までの初期時代を視野に入れつつ、五章にわたって初期の作品を考察している。第一章「紙芝居 Shylockiade」論－匿名時代が意味するもの－においては、西脇の初期時代区分を再検討することを試み、新たに匿名時代と第一次詩的沈黙時代を設定することを提示する。それによって、イギリス留学から帰国後の出発期の足跡がより明確に浮かび上がってきたことは、伝記研究のうえでも大きな成果であるといわなければならない。続く第二章「ギリシア的抒情詩」の発表誌と西脇Ⅰ－椎の木社の『椎の木』尺牘－、および第三章「ギリシア的抒情詩」の発表誌と西脇Ⅱ－アルクイユのクラブの『MADAME BLANCHE』－は、西脇の初期の主な活動舞台となった三誌を取り上げ、同時代の詩壇との関わりを具体的に検証しつつ、「ギリシア的抒情詩」成立の過程を追尋した章である。とくに『椎の木』主宰の民衆詩派の詩人百田宗治との関係に光をあてたことは、西脇の詩を高等なモダニズムとのみ理解しがちな傾向に再考を促す重要な指摘であり、また西脇のみならず、当時の詩壇状況と人間関係を通して、昭和初年のモダニズム詩研究に新しい視座をもたらす考察がなされている。また第四章「詩的沈黙期からの脱出－「コロソスの歌」と「ギリシア的抒情詩」－」は、論者の設定した第一次詩的沈黙期の意味を、その後の詩作を通してあらためて検証した章であり、第五章『Ambarvalia』生成考－「ギリシヤ的」抒情詩と「ギリシヤ的でない」抒情詩－においては、これまでの論述を踏まえながら、消息記事などを博搜して詩集のタイトルや構成などの推移を具体的にたどることで、詩集が成立する過程でその構想がいかに変容しつつ実現されたか、その編成のダイナミズムを明らかにした功績は大きい。</p>	

次に第二部『『近代の寓話』と新出資料』においては、詩集『近代の寓話』を中心に、西脇がどのように同時代を呼吸し、詩作に従事していたかについて、とくに雑誌との関わりという観点から、三章にわたって検討を加えている。序章で「このような問題意識を持つに至ったそもそものきっかけは、『近代の寓話』の諸篇に初出未詳が目立つことによる」とあるように、従来確認されていない詩集収録作品の初出を丹念に探索・調査した成果が、新出資料として提示されており、本論文の大きな収穫をなしている。まず、第一章『『近代の寓話』論－新資料「かざり」をめぐって－』では、これまで初出未詳とされてきた詩「かざり」をとりあげ、この詩が西脇の詩のなかでも本文の異同がもっとも大きいものの一つであることを明らかにし、その異同と改稿の意味を明らかにしている。また、第二章「西脇詩における聴覚性－ラジオポエム「午後の訪問」を手掛かりに－」においては、やはり初出未詳であった詩「午後の訪問」が雑誌『ラジオ文芸』に「ラジオポエム」として掲載されていることを確認するとともに、「ラジオポエム」というジャンルや詩と朗読の問題、そして従来はその視覚性に専ら関心が集まっていた西脇の詩における聴覚性という問題にあらたな光をあて、本論文のなかでも高く評価される章である。そして第三章「現代詩としての『近代の寓話』－雑誌『天蓋』『GALA』をめぐって－」は、同人として参加した詩誌『GALA』や、地方の同人誌『天蓋』との関係を通して、これまでとは異なる西脇の戦後詩壇との関わりを検証し、西脇の詩における現代性をあらたな角度から捉えようと試みている。

これらを通して、本論文においては、第一に西脇の詩人としての足跡をきめ細かく辿りながら、初期の匿名時代や第一次詩的沈黙時代など、従来は必ずしも明確にされていなかった時代区分を提唱し、その伝記的研究に新たな視点をつけ加えたこと、第二に同時代の詩誌・文芸雑誌やその編者・執筆者との関わりを通して、第一詩集『Ambarvalia』が編み上げられていく過程を時代の動向の中で浮かび上がらせたこと、そして第三に詩集『近代の寓話』を中心とする初出未詳や未発見の作品を何点も発掘し、著作年譜に新しい項目を提示するとともに、「ラジオポエム」や西脇の詩における聴覚性といったあらたな課題を探り得たことなど、その論点と資料の両面でこれまでの西脇研究を補足・更新するに足る貢献を果たしていることは、十分な評価に値する。

しかし他方では、西脇を論じるにあたって、第一詩集『Ambarvalia』、第三詩集『近代の寓話』のみが対象になっていることの問題点、とりわけ、両詩集をつなぐものとしての第二詩集『旅人かへらず』の意味が等閑視されていることの不備は、指摘されなければならない。また、同時代の雑誌の丁寧な発掘によって、詩集成立の過程については新しい知見が少なからず提示されているものの、詩集そのものの読解と分析、そして同時代における受容の様相については、不十分であると言わざるをえない。そのなかでも、西脇の詩において書き直し、読み直される翻訳・引用行為の意味や、民衆詩人百田宗治との関わりなどもさらに深く検討することで、詩人としての西脇像の更なる刷新も可能になるはずであり、本論文でわずかに言及されるにとどまっている朝鮮の詩人李応花の位置づけなどについても、論者の立場から一層の考察が俟たれるところである。

本論文には、こうした問題点も多く、今後の課題も少なくないが、労力と時間を費やした調査・探索により、西脇研究に新たな視点と資料をもたらした功績は大きく、その意欲と問題意識が高く評価されるとともに、今後の研究の進展に期待するところも大きい。よって、本論文が「博士(文学)」の学位を授与するにふさわしいものであることを認定する。

公開審査会開催日	2014年 6月 10日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	博士学位名称	専門分野	氏名
主任審査委員	早稲田大学政治経済学術院・教授		日本近代文学	宗像 和重
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授		音楽文化論・文芸批評	小沼 純一
審査委員	城西国際大学・客員教授		日本現代詩・近代詩	吉増 剛造
審査委員				
審査委員				